

巻頭言

現地調査をしながら

佐藤泰一郎¹

土壤物理学会誌への投稿数が少ないそうである。特に、現場での調査実験に関する報告が減っているようだ。現地・現場での調査、実験は、さまざまな要因が作用するため、また当初考えていなかった因子が影響して、うまく行かないことがしばしばある。特に、農家の農地の一部を拝借しての調査実験では、試験研究機関の実験圃場とは異なり、管理が当初予定したものと異なることがある。これは、経済活動としての生産を行っている農家が、そのときの現場の状況の変化に対応した管理を行っているためである。最近の試験研究は、期限を区切って成果を出すことが求められるため、不安定な現地・現場を対象とする研究を積極的に行うことが困難になってきた。また、現地での調査実験のための予算獲得は、大型プロジェクトの一部としての位置付けとして行うことなどによって可能だが、それ以外は難しい状況にある。費用対効果という観点から考えると、現場での調査実験に関する報告が少なくなることは、自明である。

私たちの行っている研究のひとつの方向として、結果や成果を現場、現地に還元することが考えられる。そのために、フィールドでの試験、実験、調査、実験室での精密なモデル実験や分析、そして解析やシミュレーションが行われている。課題、問題の現状を把握するためや検証を行うための、現地、現場での調査を行うことによって、研究が進められる。しかし、先に述べたようにさまざまな要因が絡んでいるため、いまひとつ踏ん切りがつかないことがある。当たり前のことであるが、このようなときに学会誌に掲載されている報文が重要な情報となるものである。少々不謹慎であるが、学会誌の報文というのは、ぱらぱらとめくり記憶にとどめておくものである。最近、論文の検索機能が向上したために web 上でキーワードを使った検索して、必要とする論文を探し当てることが多い。でも、記憶にとどめてあった論文は、参考になる。また、ぱらぱらめくっていると、今まで未消化でもややもとしていたものが一気に解消するような報文に出会える。特に現場での調査実験には、多くのヒントがあるものである。何年にもわたる継続的な研究には、著者の並々ならぬ努力の結果が伺える。これは、時間スケールでの努力の結果としてみるばかりでなく、調査実験の過程や執筆するために、さまざまな要因を考慮するために、どれほど悩み、工夫してまとめあげたのかを含めてという意味である。私たちは、新たに知ることによって、新しい悩みが生まれること知っている。そして、その悩みが解決したときに晴々とした清々しい気持ちになることも知っている。現場での調査実験研究には、それを強く感じる。

少し、話題がそれることになることをお許し願いたい。一昨年のことであるが、私が調査、実験をする圃場を無償で拝借していた、農家のご主人が亡くなられた。昭和一桁生まれの頑固一徹だが、うち懐に入るととてもやさしい包容力のある方だった。調査の帰りに奥様が入れてくれるコーヒーを土間でいただきながら、時には近所の人を交えて話しをするのが楽しみであった。終戦後から専業で農家を営み、はたからみると、悠々自適の生活を送っているように思えた。調査協力の依頼をしたときには少々面倒くさそうな顔をして、調査を見ても見ないともしていたが、こちらの農業に関する不勉強さを見抜き、質問に答えるだけでなく、だんだんとアドバイスや新たな提案をしてくれた。調査に関しては事前にそれとなく道具がそろえられていたり、なんとも頼もしい協力者であった。残念である。

農業は面白い！毎日毎回新しいことの発見だ！勉強することばかりだ！といいながら、農業は儲からないので自分の代で終わりだとも言っていた。80歳を迎えようとするときにトラクタを更新し、後継者がいなくなった農家の水田を耕し、1枚1枚の水田や畑それぞれの部分的な違いを考えながら夫婦で作業する姿は、頼もしくあった。このような具合であるので、私の調査の粗が見えてしかたがなかったのであろう。私の調査は、広範囲ではあるが、個々の農地を代表するものではないことを痛感させられた。私の研究のテーマについても、農家の立場から、地域の歴史を踏まえながら、ときには資料を持ち出してきてアドバイスをしてくれた。そして、経済活動としての農業のみならず、地域の活性化や振興について強い気持ちがあったのであろう。亡くなられる前年の秋にお会いしたときに、ご自宅の前の水田で稲刈り後に、全てコスモス畑にして、近所の人達と花見をして楽しんだことを、自慢げに話していた。農業は生産することばかりではなく、楽しみをみなで共有することを教えていただいたような気がする。研究は、私たちにとって真理の探究、知的好奇心を満たすもの、社会の要求に応えるもの、職業、学業であったりするものであろう。当たり前のことなのかもしれないが、私も研究を楽しみ、みなで共有することことに努めたい。現在は、近くに住むご息女一家が跡を継いで農業が続けられている。きっと、ご本人が一番喜んでいることであらう。

¹ 高知大学教育研究部自然科学系農学部門